

4月29日開催実在論ワークショップでの講演：プレ要旨（2017/04/01）

ハイパー時間：時間それ自体への探求

エリー・デューリング

事物をそれ自体において捉える方向に議論を進めよう、新しい実在論の形而上学との対話のために。すでに考えはあるけれども、まだ執筆はしていないので、プログラムとしてのルート案だけ簡単に示そう。

ポイントは、実在論の問題に、形而上学と科学における時間及び時間の思考の役割についての反省を介して向き合うこと。

もちろん最初に論じたいのは、メイヤスの意味での「祖先以前の¹」問い（フッサールがすでにして意識以前の世界というこの問題をまさに立てていた、ただし私（デューリング）は根本的に違う結論を引き出すために用いるけれども）。私がこの見解に留保せざるをえない主要な点は、祖先以前の議論において科学が占める役割にある。科学、科学的な時間は、一種の宇宙論的な時計の時間で、それは無限の宇宙の中にいる人間に対して、その時間的な位置を告げる任を担っているものだ。ところで、こうした時間は、人間意識につきまとうクロノジックな図式を、拡大適用したもの、外延化したものにほかならない。メイヤスは、あっさりとして時間の超越的形式へと引き返す。彼は、この形式としての時間を（事物のうちに）外挿して、意識創発の出来事を考察する（そして視点に結びついた超越論的なものの可能性を）。カトリヌ・マラブーは、この問題を論じていて、それについて（本は持ってきてないけれども）一言言うつもりだ。他の哲学者（ホワイトヘッド側の）が示したのは、視点という概念は、必ずしも超越論的なものの概念を含んでおらず、ある種の自然哲学ならば、経験の「主体」をいっぺんにご破算にしてしまうことなしに実在論を引き受けることが出来る、ということだ。超越論的なタイプの議論にたいして私自身が感じる問題は、もっと単純で、それが、時間についてのある種の科学的な構築物に、あまりに存在論的に重きを置きすぎる点だ。

より一般的に言えば、私が示したいのは、時間（時間の形式）が、もろもろの実在論や思弁的唯物論たちが経験の「ア・プリオリな形式」（カント的な超越論的なもの、概念ないし言語的な図式、など）の向こう側に探し求めているあの「実在 Réel」への内在的なアクセスを、提供してくれるということだ。

敢えて言えば私が擁護しているのは構築主義的な捉え方で、その捉え方によれば時間の形式はもはやまっ

¹ メイヤス『有限性の後で』二四頁。

たくア・プリオリな形式ではない。いわば、超越論的なものははじめから「自然化」されているのだ。ただし、それは、(実在の唯一の平面上で全てをならしてしまふ還元主義的な意味で自然化されているというのではなく、)超越論的なものが、あるしかじかの状況を、実在ととりむすぶさまざまな関係の束を、自ら表現するほかない、という意味で、である(バルクソンのように、超越論的なものは、(実在への私たちの偶然的なアクセスを支配する)実践的な諸条件を表現すると言ってもいい)。

しかしながら、時間の形式は、やはり形式に留まる。時間の形式は、概念や技術、文化の豊かな発明をつうじて、その次元を増加させることが出来るような主体に依存しているのだから。時間の形式は、諸形式が一般に果たす役割を果たしている。すなわち、経験の統一性を与えること、あるいはむしろその散逸を組織すること、という役割を。

肝心のポイントは、この時間の形式は、メイヤサーの言うあの「透明な檻」²、これのおかげで、認識主体が実在を定義する「相関」の環のうちに決定的な仕方で身を置くことになる、あの「透明な檻」とはまったくことなるという点だ。この檻は、極めて不透明な仕方で示されることも出来るし、それはひとがこれを以下の二重のプリズムを介して構成し、洗練させた分に応じて、不透明なものとなる。二重のプリズムを構成するのは、1) 生きた主体がその環境にたいしてもつ最初の「てがかり」(これが時間の心理学の研究主題である)と、2) 科学の概念的な洗練(ニュートンから、相対論、量子重力、等の)。

私としては、怪物的な形式(ハイパータイムという用語もそこから来ている)について考えたい。これはカント的な枠組みを破砕するものであり、かといって経験全体に統一を与える形式という考えを手放さなければならぬわけでもない。

ハイパー時間については、いくつかの形象を喚起することも出来る。たとえば、圧延された時間(地層学)、雲としての時間(統計学)、歪像的時間(相対論)、離散的時間、二次元時間、フラクタル時間、等。

しかし、ハイパー時間のミニマルな形式、もっとも純粋な形式でもあるけれども、それは、シンプルに「同時的」と呼ばれる「直交的な」次元(「同時に」あるということ)によってもたらされる。

時間は、根源的には流れや移行ではない。それは、たんに継起の純粋形式なのではなく、同様に生成のエンベロープ³であり、これが共存に形を与えるのだ。時間は、きわめて多様なモデルたちが共存するために、存在している。いかなる概念的な発明(哲学でも物理学でも)も、古代思想における宇宙論的な解決(これは世界靈魂を要求する、これはプラトンの言い方を借りれば可知的なものの墮落版であり、永遠の動く似像である)に頼ることなしに、「時間の中で一緒にあること」を考える点に存している。

だから問題は、全体というもの(あるいは形而上学の伝統に言う tota-simul)について新たな形象を発明す

² 『有限性の後で』一八頁。フランシス・ヴォルフからの引用。

³ エリー・デューリング「共存と時間の流れ」(清塚明朗訳)、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編著『『物質と記憶』を解剖する』書肆心水、二〇一六年、二九一頁。

ることにも関わっている。全体は、断層化されていたり、もつれていたり、あるいはまた多孔質であったり、拡散し分散していたりする。それが示唆するのは、有名な「物自体」の時間化されたバージョンであって、実はカント自身がすでにこの論点を垣間見えていた（ただし、主観的な様相においてのみ。第三批判で崇高なものの経験を同時的なヴィジョンの経験に結びつけている箇所）。そしてそれゆえに、こうした意味での全体は、カント以来、美学によって開かれる問題系へと一般に接続するのである。それは思考その能力の臨界にまでもたらし、何か悟性の総合的な力能にたいする挑戦となるもの、概念の規則を逃れ、（崇高の事例においては）完成の受容能力すらも逃れるようなものを、一瞬の輝きのうちに垣間見せる。同時性というものは、伸びた影のようなもので、物自体の薄暗い徴しである。この点でハーマンとの繋がりは明らかだ。彼は Lingis の書物から以下のうつくしいくだりを引用している。「“The things have to not exhibit all their sides and qualities have to compress them behind the faces they turn to us, have to tilt back their sides in depth and not occupy all the field with their relative bigness, because they have to coexist with one another and that field has to coexist with the fields of the other possible things”」

そういうわけで私の発表は、ハーマンの「妙な実在論 Weird Realism」に呼応する形で「妙な共存 Weird Coexistence」という題にすることも出来た。

要約すると、ハイパー時間という核になる概念があって、それは同時性の問題の形式をとる、ということだ。「問題」と述べたが、それは、意識の流れや内感の流れに典型的に見られる継起という観念とは逆に、距離をおいた同時性という観念にはいかなる根拠もなく、複数の時間的な流れのあいだの能動的な構築、調整（共座標化）をつねに想定している。さて、この同時的なものの構築を突き詰めれば、時間についてのあらたな諸形式に達する。そしてこれらは、しばしば直観的に把握することが極めて困難なものだ。

たとえば特殊相対性理論における éclatée な同時性と言えども、理念的なモデルでしかなく、時空の無限小断片に局所的に妥当するだけだ…。(現象学的な仕方で捉えられた共存は、この観点からすればきわめて貧しいものと見える。すくなくとも、共存が、実存者たちの、世界を感じるひとつの同じ肉への一種の共属感というものに切り詰められてしまっている場合にはそうである。メルロ＝ポンティ「“Toute l'énigme est dans le sensible, dans cette télé-vision qui nous fait au plus privé de notre vie simultanée avec les autres et avec le monde.”」サルトルでは、事態はまったく違う歩みを辿ることを、示すことも出来る。彼が『奇妙な戦争—戦中日記』のある驚くべき一節で、共存の経験を、不在の純粹経験とするとき。この同時性は、言ってみればくりぬかれた en creux 同時性、否定的な同時性であり、脱結合 déliaison の同時性であるが、これはホワイトヘッドの共時性という概念のうちに、明確な反響を見て取れる。)

一点明確にしておきたい。時間の諸形式がある、と複数形で述べた。デリケートな点は、この時間の形式は、どんな特定の経験的な生成の曲線とも混同されてはならないという点だ。時間の諸モデルは、あくまでも「諸モデル」でしかない。「時間の根源的な働き」（潜在的・現働的の分裂）のうちにこそ、実在的な生

成の原理を見いだそうという、ベルクソンの持続理論の全掛け金、さらにはドゥルーズ思想の全掛け金は、まさにこの点にかかっているのだ。

まさにここで想起しなければならないのが「純粹過去」というベルクソンの考えだ。決してその現在で会ったことがないような過去、そうではなくはじめから過去として産み出され、それゆえにそれ自体で保存されるような、過去。記憶（そして根源的には、過去）は、事後的に、現在が生じた後になって形成されるのではない。現在に共時的なのである。これは、ベルクソンが「現在の記憶」を論じたテキスト⁴で展開した途方もないアイデアである（このテキストについては私自身が PUF で校訂版を出した）。

私としては、この考えを、対称的に、未来の方向にも展開してみたい。いわば「純粹」未来、「それ自体における」未来とは、どのようなものになるだろうか？これは私が「未来は実在しない」と題した実験的なテキスト、とりわけその「現在の郷愁」を論じた箇所⁵で考察した問いのひとつである（早稲田大学での講演で、アカデミアから邦訳をダウンロード可能。）。

次の段階として理解すべきことは、同時的なものを、物質的なレベル（＝諸出来事ないし生成の諸線のあいだの同時性）だけでなく、形式的なレベル（＝相互排他的なアスペクトないしパースペクティブのあいだの同時性）でも考えることの困難さが、経験の根本的に「離散的な」性格にもとづくという点だ。すなわち、経験の生地には、ひいては持続そのものにも、（バシュラールが述べた）「空隙がある」という性格のことだ。実在は、穴だらけなのである……。

ハイパー時間は、しばしばこの問題に対する解決として持ち出される。たとえば、相対論的なハイパー時間は、「時空」という名で呼ばれているもののことで、これは「同時性の相対性」問題にたいするひとつの解決である。あるパースペクティブから別なパースペクティブへの移行、ある同時性平面から別な同時性平面への移行をエレガントに説明してくれる。要するに、この時空というもののおかげで、互いに対して運動状態にある複数の観察者群が有する離散的なパースペクティブを、より抽象的なレベルで再統合することができるようになったのである。その結果どうなったか。同時性そのものが、客観的な意義をいっさい失ってしまったのである！（そしてほどなく時間そのものが消える、現代の形而上学者たちにしたがうなら。）

しかし、ハイパー時間には、逆に、問題を先鋭化し、その諸条件を明確化することで、現象の離散的な性格をさらに強烈なものにするということも可能である。そうしてこそ、その形而上学的な意義をいかに発揮できる。実際、ハイパー時間は、現象的经验の領野において構築された諸対象よりもむしろ、解放された「諸事物 choses」の存在論を思考することを強いるものだ。「諸事物」は、間欠的な仕方で離れて共存し、日常的な因果結合を越えており、局所的な関係（漸次的な近接的連結）を越えている。こうした非局所性というテーマをとおして、この点がハーマンにどのように再び接続するのも見やすくなる（彼

4 「現在の記憶と偽再認」『精神のエネルギー』所収。

は「実体」という概念を、実在的な存在の根本的に孤立した性格を記述するものとして再評価している)。

以上が最近関心をもっているテーマから作れる話の筋である。理想的には、以上の論点全てが実在論をめぐる昨今の議論にどう影響するものかを示せたらと思っている。

(簡易訳 平井靖史)